

海邊の娘

暗い家庭と、廣い都會と、荒んだ人間とに飽き／＼して、旅から旅へ放浪してみたら自由な、壓迫の無い面白い生活が出来たらうと信じて、少年詩人の土肥黒潮は東京を抜けた。

土肥は友人を頼つて、海邊の小都會に半月餘り日を送つた。

友人の談話も、海の音も單調であつた、少年詩人は今更輕

卒に都會を去つたことを悔いた、もう都會に歸らうと思つたが、何か變つた面白いことがありさうなものだと、毎日小さな市街を歩き廻つた、そして夕方は毎も海邊に出た。其うちに一つの刺戟が起つた、對象は若い女であつた。友人に誘はれて、町の小料理屋で酒を飲んだ時に、町の藝妓も來たが、藝妓は土肥の子供々々した様子を見て、劈頭から小僧扱ひにした、黒潮は詩や歌にこそ空想の戀を歌つてゐるが、實際の女には初心であつた、初心ながらも女に椰榆ふ氣は充分持つてゐた、何か言つて見たいやうな氣がするのだが、友人のものなれた遊びぶりに吞まれて了つた、

彼は忸怩として居る許りて、藝妓と詩人とは没交渉に終つた。

幸に其家に小娘があつた、一度東京へ出たことがあると云ふので、土肥とも話の端緒が早くついて、二三度行く間に親しくなつた、娘はおゑんさんと言つた、標緻も満更でない處から、自由を欲し、早熟に出来た土肥は忽ち意中の人として了つた。

* * * * *

海の寂寥。

毎日海に来て見ると海は實に淋しい、單調だ、地平線の上

には、例も同じやうな形と、同じやうな色をした雲が在つて、沖には白い小さな波が閃めいてゐる、海邊の砂原に脚を伸して、詩集を讀んだり、茫然考へ込んだりしてゐると、少年の心には自然と云ふものが餘りに淋し過ぎた。

『土肥さん美味しい食物を持つてきましたよ』

後ろにおゑんさんが立つてゐた、友染メリンスの前掛で隠してゐるのは其美味しい物であらう。

『能く漬へ入らつしやるのね、御退屈だらうと思つて、内てこさへた蛤の時雨煮を持つてきました、名物ですよ、喫つて御覽なさい』

土肥は何の譯と云ふことなく、嬉しい氣がして感興に乗つてきた。

『ありがとう』

と云つた彼の顔色には感謝の輝きと、おゑんさんを引留めやうとする人懐つこい表情とがあつた。

おゑんも砂の上に踞つた。

『マア此んな所で書物をお読みになるの、勉強ね』

『勉強でも何でもない、仕様がなからず、おゑんさん、面白いことはありませんか』

『斯んな田舎に何の面白いことがございますものか、それ

よりか東京の面白いお話でも聞かして下さいナ』

『東京が嫌で逃げて来たのサ、田舎の方が面白いだらうと思つて』

『あらマア』

おゑんは其が何う云ふ理由か分らなかつた、只世辭に過ぎないのだらうと思つた。

土肥は短兵急に戀を語りたのだけれど、其折衝に困つた。時を刻んで打つて来る浪に、彼の心は動搖した、それでも強て鎮靜て、對者の胸を探らうと思つた。

『おゑんさんは何れくらゐまで學校へ行きました』

「私學校は嫌ひだつたもんですから、ほんの小學校だけしか行きません」

「歌といふものを知つてますか」

「知りません、教へて頂戴な」

土肥は詩集の間に挿んであつた——自個の詠草を取出して、おゑんに見せた、おゑんは披けて見て、口の内で讀んでみたが、一向に意味は解らなかつた。詠草には激しい戀の歌が十五六首書いてあつた。土肥は砂の上に接吻と云ふ字を書いては消し、書いては消した、女には何の字とも讀めなかつた。

「寂しいなア」

と土肥は獨語のやうに言つた。

「そんなに寂しけりや、家へいらつしやいな、いくらでも賑やかに遊べますわ」

「遊んだつて少しも賑やかぢやない、心の内部から寂しいんだ」

「斯んな處で獨で居たら誰だつて寂しいぢやありませんか」

「二人なら寂しくない？」

問ふやうに言つて見たが、おゑんには何の反應もなかつた。

『東京へ連れて行つてあげませうか』

『椰櫚つては嫌よ、眞實にしますから』

『眞實にや』

『あなた、それよりか金銭を持つてゐらつしやるてせう』

『何故』

『私ね、欲くつて欲くつて堪らないものがある』

『金なんか持つてやしない』

『嘘、聞きましたよ、確に持つてゐらつしやるつて、ね、

あなた、私の言ふものを買つて下さいな、然う高價はない

ものだから』

『物によつたら買つてあげても可い、一體幾許ぐらゐなものなんだ』

『まア三圓までのもの』

『實は僕の懐中に金はない、二三十錢あるだけだ、東京へ歸りたいんだけれど汽車賃が出来なくつて困つてゐる位だから、徒歩で歸らうか知らと思つてゐる、此書物も賣れたら小遣にする積りだ』

『全く然うなの、ぢや買つて欲くつても駄目ね』

『金なら東京から取寄せられぬこともない、だからおゑんさんと二三日に一緒に旅行してみたいが、行きませんか』

「だつて金銭を持たない人と一緒に旅行が出来るもんですか、私、内で叱られますわ」

「僕の爲に行きたまへ」

おゑんは返辭をしなかつた、曇つてゐた空が俄に明るくなつた、夕雲の切目から日光が洩れて、海の色は一面に蒼茫なつた。

「どら歸らうかなア」

と、おゑんは起上つて、塵を拂つた、砂がハラ／＼とこぼれた。

「土肥さんもお歸りなさいよ寒くなつてきますから」

「まだ歸らない、暮れるまで此處にゐる、夕方の海ほど好きなものはない」

土肥は詩集を取上げて、明るくなつた光線の下に何かしら心の空虚を充たすやうな芳烈な文字を探した。おゑんは、

「おやうなら」

と言つて、後方も顧みずにさく／＼と砂を壊して歸つて行つた、土肥は時雨煮の禮も言はなかつた、砂の上には自作の詠草が落ちてゐた、風に吹かれて海へ行けば面白いがと思つて、其まゝ拾はうとしなかつた、歌反古は風に舞ふて、陸の方へ散つた、土肥は疍積らしく身を起して、反古

を引摺んでまるめた、其手で海へ抛り込んだ。

旅 寐

自殺でもするのかと疑はれて、宿の女中に追跡られたほど、深い物思ひに沈んで居たのだから、其時の自分の態度は想像される。

都會に近い磯の松原、砂清く、海靜かに、夏の初めの宵月さす頃であつた、自分が吾家を飛出して此濱邊へ來たのは、一つは景色の好いのに人が來ないのと、四五軒の料理屋の外に家と云ふものがなく、何となく人間を離れたやうに思

はれるからであつた。

夕方、しづかに松の根方に腰掛けてゐると小さな蟹が無數に、砂の上を這ひ廻つてゐる、松葉がこぼれてゐる、貝殻が落ちてゐる、浪の音が時を刻んで、單調に響いてゐる、松原越しに動かぬ燈火が見える、何かしら考へる爲に來たのだけれど、何事を考へやうとも思はない。

自分の取つた宿は元來料理屋が主で、人を泊めない筈であるが、餘り流行らない家で、客も日に二組か三組あるだけ。客と云つても多くは晝間に來るので、夜は四五軒の料理屋何れも寂然として、女中の聲が松原の淋しさを破つてゐる

位のもの、それも軒並びでなく、松の枝振や、海の見晴しの都合好い場所を選つて建てたのだから、何の家も離れて居る、斯う淋しくては遊びに來る人の無いのも當然だが、自分には持つて來いの隠れ場所のやうな氣がして、何うか泊めてくれと頼み込んで、四五日は逗留することにした。自分が家出の理由は甚だ複雑してゐる、判断や解決のつく筈はない、功名心もある、戀もある、むしろくしやもある、空想ばかりで頭腦をこしらへてゐる時代だから、周圍の暗い家が嫌になつた、世の中へ出さへすれば美しい自由なものと思つてゐた、然して家を世で何を爲ると云ふ的な

い、只生活を一變して見たい、舊い習慣ばかりを黒守つて行く吾家の生活が氣に入らぬ、つまらなくて、つまらなくて堪へ切れない、自分には、外に出来ることがあると固く信じて、一も二も家に反抗したくなる。それで出て来たことは出て来たもの、家で想つたやうに世の中は面白く出来てゐない、女中の輕薄な笑ひ聲や、下等な世間咄を聞くと、侮辱されたやうに感じて、自分を只のお坊つちやんと思つてゐるのかと腹の底で不平が起る、さればと云つて合槌を打つて彼等と共に娛むほどの勇氣もなければ小説の材料にでもする氣で、彼等に椰榆ふほどの好奇心も起らない、

不安は身に纏綿ふてゐる。
氣がつかなくなつた月の光が、はつきりと松の枝を砂に映した、松の幹を幾つもくゞつて、枝折戸を明け、飛石傳ひに椽側へ来た、麻裏を脱ぎすて、自分の座敷へ上ると、行燈を細めに點けて寢床を延べてある、早く寢よと言ふことであらうが、少し物を書いて見たいと思ふのにランプを持つて来ないとは氣が利かぬと、又腹の底で面白くなくなつたが、殊更明るい火を呼ばうとは思はない、暫く夜着の上に座つて考へて居たが、其儘枕に就いた。
浪の音が遠くから、微かに、大きく聞えて来る、引かれて

行くやうに思ふ、容易に眠られない、拍子木の音が響いて来た、段々近づいて来たが、此家の前でハタと止つた、板場ではまだ起きてゐる、拍子木を打つて来た男と、女中とが高い聲で咄をしてゐる、咄の様子では、今日の夕方、怪しい男が二人、此松原に粉れ込んで、何うやら隠れて居るらしいと云ふこと、怪しい男とは盗賊か、人殺か、何でも曲者に相違ない、物騒な晩だから用心して睡眠なさいと、親切らしく言葉を残して男は去つた、拍子木の音は段々遠ざかつて行く。

此家は今、女中ばかりしかゐない、さる有名な料理屋の支

店になつてゐるのだから、能く流行る時には本店の方から男も、女も澤山来るが、今は閑散だからと云ふので、女中が四五人居る許り、云はゞ留守をしてゐるやうなものだ、此淋しい松原に能く女ばかりで居ると思ふ、曲者の用心を注意されたのも至當だ。

夜が少し更けた、浪の音は少しも變らない、女中達も大方は寝たらしい、支店と云つても料理屋のことだから相當に間敷がある、何處に寝たか自分には分らぬ、家の内が静寂になつた、女ばかりだと思ふと先刻の怪しい男の咄が氣に掛つて、若し曲者でも忍び込んだら何うしやう、年齢は若

くても自分は男だ、お客様だからと云つて蒲團被つて寝た真似をしてゐる譯にも行くまい、飛んだ家へ泊り込んだものだ、早く夜が明けてくれると可い、自分の身の上のことより、刻下の不安に又眼が冴えて来る、浪の音は頻りに睡眠を誘ふ、時計は十一時を打つた。

うつら／＼としたかと思ふと、ひそ／＼と話聲が聞える、宵の咄を思ひ出してぎよツとした、併し話聲は存外平穩だ、まだ女中が眠らなかつたのかと思ふたら然うでない、話は椽側の端だ、女の聲と、男の聲で、女は殊に内を憚つてゐる様子、男の聲はそんなに低くもない、女は頻になだめて

ゐる、男は初め不平らしかつたか何か納得したらしい、「お客様だつて男じやないか、何うして泊たのだい」何うしてつて、頼まれたからさ「何だか分るもんじやない、四五日居るつて言ふのだね」さう、もうお歸りよ、ね、遅いから「歸る、歸るよ、ほんとに馬鹿にしてやがらあ、冗談じやねえ」何を言つてるのだらう、此人は、今夜だけじやないか「よし分つた、まあ歸るとしやう、それで店の方は何うなつたのだい」呼びに来たつて急に歸りやしないから大丈夫よ「さうか、まあ巧くやつときねえ」話はひそ／＼聲だけれど、夜が更けて、周囲が静寂だから能く聞取れる、男

は縁の外に居るらしい、兩戸を一枚開けて話してゐるらしい、女の方は聲で分つた、女中の中の一番年長な、圖抜けて大きい女だ、骨格も逞しく、身丈も高く、今日物を言はれて自分は返答におづ／＼した愛嬌と云つて別にないやうだが、世熱れた態度、外の女中は皆此の女に憚つてゐるやうに見えた。

男も去つた、女も寝た、夜は更に開けて燈火の影が暗い、浪の音、また浪の音。

昨夜は自分の家で寐た、今夜は此處で寐る、僅に一晩のこととて、斯うも世の中が違ふものか知ら、自分の考へやうと

思つたことは考へられずに、いろ／＼の刺戟を受ける、世間は飛出す處ではない、意味も何もなくされて了ふ、一晩ですら此通りだ、つまりなくとも吾家の方が、未だ何か知ら考へたり想ふたりする餘裕がある、安心がある、實際彼の浪の響の上に乗つて居るやうな心持がして沈靜かない、夜が明けたら一つ考へを變更て見ねばならぬ。然う思つても亦、吾家よりは自由な、放縦な、開放された天地があるやうな氣がして、恐ろしい夢も見ずに、すやすやと浪の音の裡に眠つて了つた。

明治四十三年五月六日印刷
明治四十三年五月七日發行

定價金五拾五錢

著者 河井 醉 茗

發行者 東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地
四村 寅 次 郎

印刷者 東京市神田區松下町八番地
横田 五十 吉

不許複製

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地

發行所 東雲堂書店

電話本局一六三九番
振替東京五六一四番

横田活版所印刷

出版圖書目錄

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地

東雲堂書店

◎青年の實力を示すべき好個の短篇集◎

田山先生花選袋

木山 下田 茂實 畫

二十二篇

再版發賣

四六判美本
紙數 三百頁
定價 五十五錢
送費 六錢

執筆者

皆川 越知 橋本 上田 松山 水野 加藤
行人 水草 菱水 良一 胡果 仙子 掬雨
穂岐山 小浪 川浪 夕水 尾知山 靜波
西村 小徑 秦菱 落穂 田中

本書は過去四年間に文章世界紙上に現はれたる青年作家の作品より、更に田山先生選抜して、その最も優れたもの二十二篇を收む。本書に收められたるものゝことは、皆現文壇の諸作に比するも毫も遜色を見ざるもの。敢て文藝を談ずる青年諸氏の一讀を推奨す。

岩野泡鳴新作(近刊)

長篇 小説

放浪

定價 郵未
定價 稅定

「神秘的半獸主義」「新自然主義」の著者として夙に日本の論壇に異彩を放ちつゝある泡鳴氏の最初の長篇小説也。著者昨冬北海樺太の天地に放浪するや、其耳目に觸れし北海特殊の風物と複雑せる世相人生とは、歸來其全力を傾倒して執筆せる新作『放浪』に最も鮮明なる色を以て描き出されたり。本書の出版は以て寥々たる創作界の震撼するに足るものあるべし。

石井柏亭装幀・歌數一千首

若山牧水著

歌集別離

菊半截總クロ
天金肖美ロ
著者肖像入
定價金七拾五
送費金八錢

△「別離」は著者の先に著したる「海の聲」「獨り歌へる」を併せ、加ふるにその後の新作全部を以てす。

△最も深く眼覺めたる歡喜の歌、苦悶の歌、悲哀の歌、寂寥の歌はこの小さき一卷に満ちたり。

△同じくうら若き人々の机下に献ず。

中村星湖著 高村光太郎装幀(新刊發賣)

小説 星湖集

四六判四百頁
佛蘭西式裝釘
定價金六拾五錢
送費金八錢

著者は青年作家中絶えず摯實なる態度をもつて創作をつづけ、尤も未來を囑せらるゝ一人也。その諸作は目して多く傑作とせられ、常に評論壇を賑せたりき。今その近什十四篇を輯めて本書成る。收むるところ、一切の事、白晝、朝鮮へ朝鮮から、つゝ音、石を持つた女、村の『西郷』、木像の批評、行路病者、嬌笑、つなぎ糸、敵地、畑、犬ころ、粉負ひ、以上。

島村抱月氏序 馬場孤蝶氏序
仲田勝之助譯 名取春川裝幀

ツルゲネフ 散文詩

四六判二百頁・定價三十五錢・送費四錢

ツルゲネフ散文詩は彼が思想の精華にして、彼が心的縮圖也。その文體の精練、觀察の深奥銳利なる他にその比を見ず、まことに世界文壇の花なり。本書には彼が最も得意なる散文詩の作五十篇をあつめ、更に彼が長逝數ヶ月前に書ける有名なる「門口」一篇を加ふ。また小引として譯者の解説を附し、以て彼が文體を學ばんとするもの、便に供す。譯は忠實精緻、坊間に行はるゝこの書のごときものと少しくその撰を異にせり。

十月會歌集

黎

明

|| これ實に歌壇の黎明なり、新曙光也 ||

歌數五百首
定價四十錢
郵稅四錢

本書は下記諸氏の最も得意なる歌各數十首を收む。

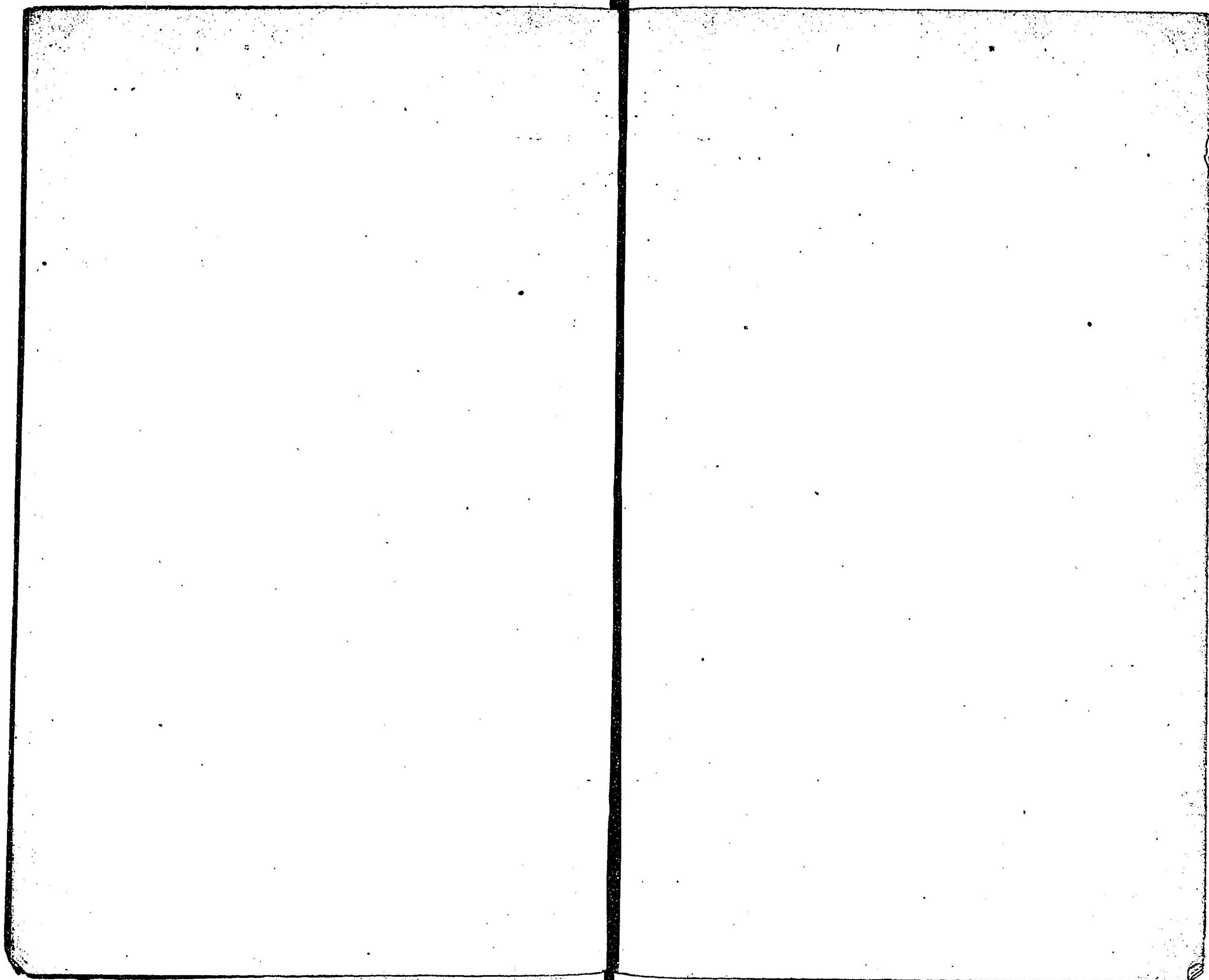
水野葉舟	高瀬俊郎	植松壽樹	綱野新二郎	川崎左右	加藤豊	松村英一
半田良平	田中完治	岡田道一	石井貞子	山下要	宗耕一	窪田空穂

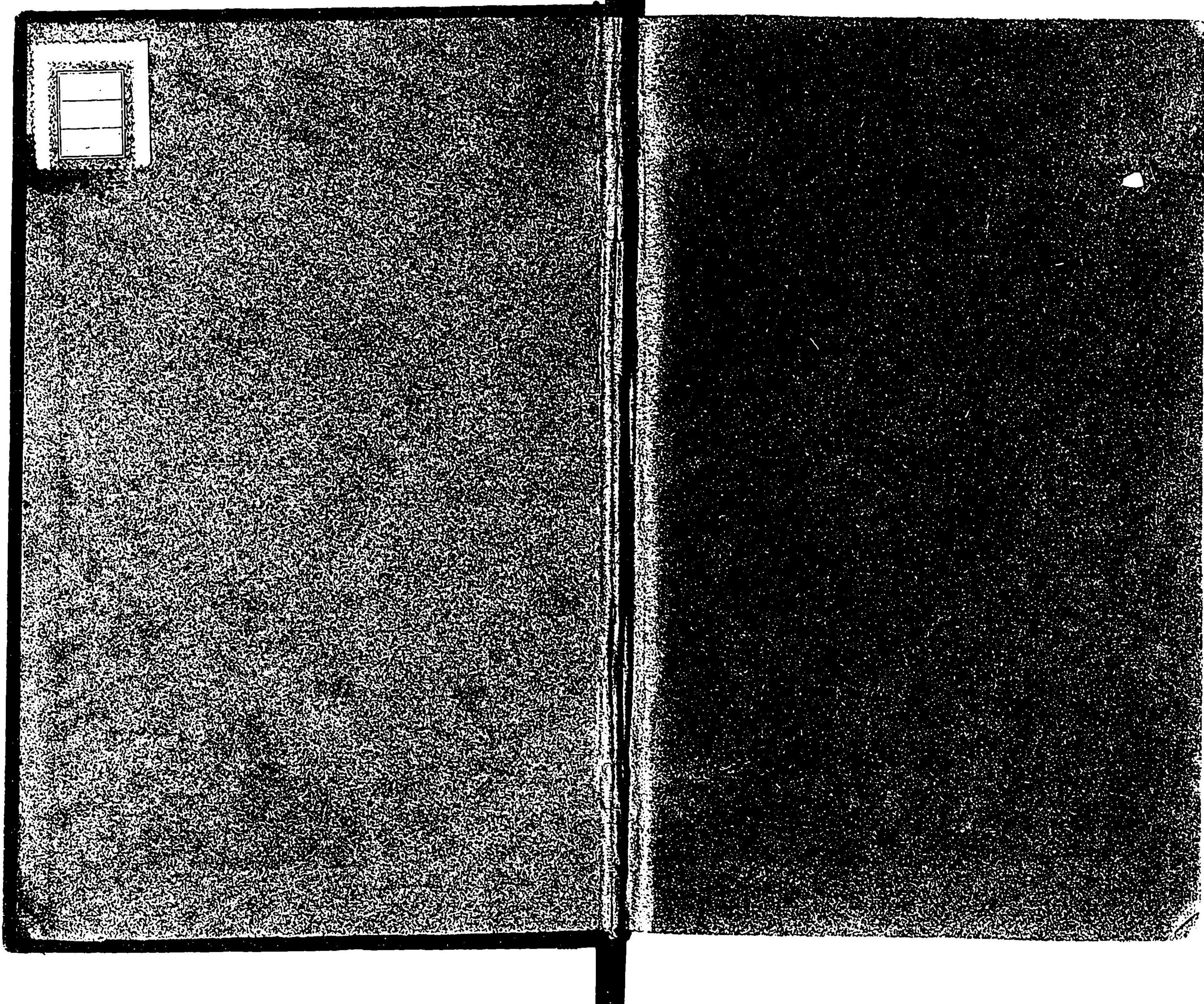
露國 クロポトキン 著

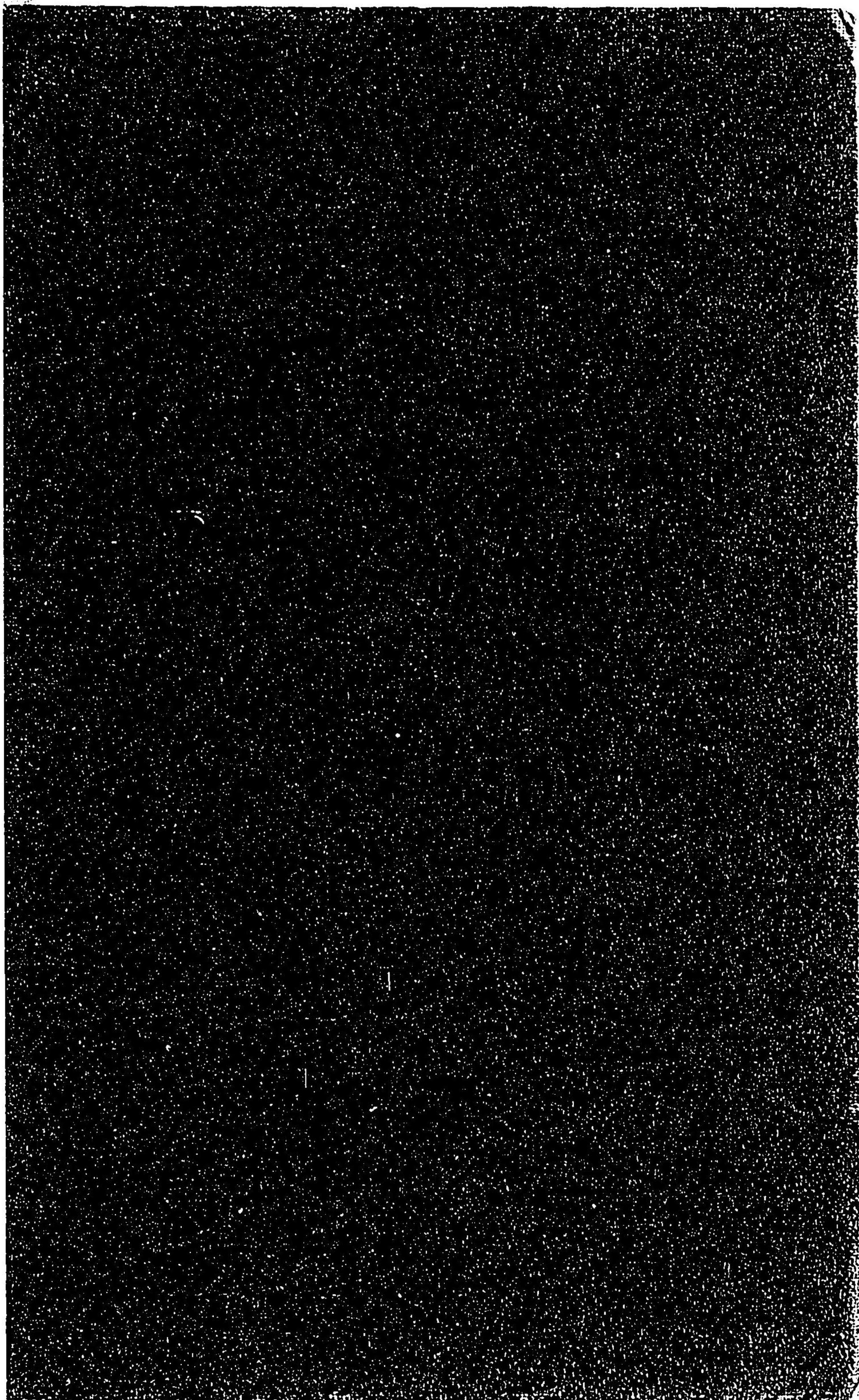
日本 佐藤綠葉 譯

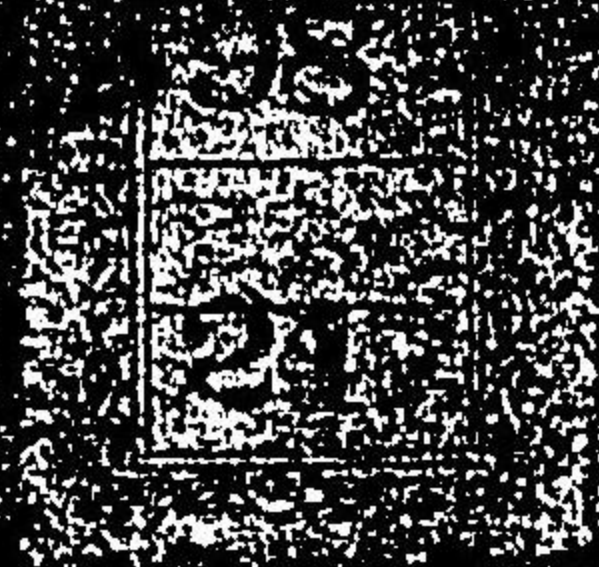
一露西亞文學史一

—(近刊)—









096026-000-8

98-247

霧

河川 醉茗/著

M43

DBR-0298



